

生物分類群毎のカルテの整理状況

1. 情報収集の方法

- 平成 25 年度：『日本の重要湿地 500』の情報提供者等へのヒアリング
- 平成 26 年度：①情報提供者へ再依頼、②地方自治体等へのヒアリング、③既存文献の調査（自然環境保全基礎調査/モニタリングサイト 1000/都道府県発行の報告書等）

確認

湿地と生物分類群の組み合わせは 961 パターンある

→複数の生物分類群で同一の湿地が選定されている場合があるため

（例：No. 88 蕪栗沼では、「湿原植生」「ガンカモ類」「淡水魚類」「淡水貝類」の 4 つの生物分類群により選定）

2. 情報収集の状況

● 生物分類群毎の情報の収集状況

別紙 1 に示すとおり、情報が得られた湿地は、生物分類群毎で集計すると、874 湿地／961 湿地ある。

一方、情報がなく、改訂作業の判断材料が得られていない湿地は、生物分類群毎で見ると 87 湿地／961 湿地、湿地単位で見ると 33 湿地／500 湿地（別紙 3）

● 「選定根拠の種が長期にわたり確認されていないとの情報があつた湿地」と「消滅したとの情報があつた湿地」

別紙 2 に示すとおり、「選定根拠の種が長期にわたり確認されていないとの情報があつた湿地」が、12 箇所確認されている（表 1）。

また、陸地化により湿地が消滅した湿地や東日本大震災でアマモが「ほぼ 100%」消失した湿地等、「消滅したとの情報があつた湿地」が 4 箇所確認されている（表 2）。

● 新たな選定候補地

別紙 1（最右列）に示すとおり、新たな選定候補地は、生物分類群毎で集計すると、302 湿地ある。

このほかにも、「ラムサール潜在候補地」に挙げられていて、『日本の重要湿地 500』に含まれていない湿地 17 湿地についても、選定を検討する。

3. 分析結果

(1) 湿地環境の現状

分析方法

961 湿地（湿地と生物分類群の組み合わせ）のうち、情報が得られた 875 湿地について、「顕著な変化なし」「改善傾向」「悪化傾向」と、（悪化傾向のうち、とくに）「選定根拠の種が長期にわたり未確認」と「湿地の消滅」、および「その他」の 6 つの現状に分け、生物分類群毎に、その湿地数と割合を整理した。

複数の情報提供者から異なる情報（例えば、「顕著な変化なし」と「悪化傾向」）が寄せられた場合には、情報の内容を総合的に判断し、いずれかのカテゴリーに分けた。



傾向

別紙 1 に「湿地環境の現状」を示す。

- (1) 湿地の劣化は、すべての生物群に及んでおり、全体的に見れば、湿地環境は悪化傾向にある。とくに、淡水魚類、爬虫両生類、ウミガメの生息環境が悪化している
- (2) 一方、調査や保全・再生の取組が進められた結果、とくにサンゴ礁、淡水藻類、シギ・チドリ類などの鳥類については、環境が改善傾向にある湿地も見られた

(2) 劣化の要因

分析方法

961 湿地（湿地と生物分類群の組み合わせ）のうち、「悪化傾向」にある 530 湿地（湿地と生物分類群の組み合わせ）のうち、劣化要因について情報のあった 351 湿地について、その主たる要因を以下のとおり分類した。

- ・ 「第 1 の危機」（開発など人間活動による危機）
- ・ 「第 2 の危機」（自然に対する働きかけの縮小による危機）
- ・ 「第 3 の危機」（外来種など人間により持ち込まれたものによる危機）
- ・ 「第 4 の危機」（地球温暖化や海洋酸性化など地球環境の変化による危機）
- ・ 「複合的要因」（第 1 から第 4 の危機の 2 つ以上に該当するもの）



傾向

別紙4図1に「劣化の要因」を示す。

- (1) 「第1の危機」、とりわけ開発・埋め立て・護岸整備の影響が大きかった
- (2) 「第2の危機」では、ニホンジカやイノシシによる湿原植生への食害が多く報告された
- (3) 「第3の危機」では、淡水魚類などに対して、依然として、国外外来種のオオクチバスの在来種への捕食圧が大きいほか、モツゴなど国内外来種による影響がでている湿地もあった
- (4) 「第4の危機」の割合が「第1の危機」に次いで大きく、地球温暖化による海水温の上昇が、とくに藻場やサンゴ礁に見られた。ただし、東日本大震災により発生した津波や地盤沈下による影響もこのカテゴリーに含めたため、相対的な割合が増加している
- (5) 第1から第4の危機のうち2つ以上が主因となって、湿地環境の劣化を引き起こしている事例もあった

(3) 湿地面積の変化

分析方法

500 湿地のうち、湿地面積に関する情報があつた 370 湿地について、「顕著な変化なし」「減少傾向」「増加傾向」の3つに分類した。



傾向

別紙4図2に「湿地面積の変化」を示す。

- (1) 「減少傾向」にある湿地の割合が、「変化なし」に次いで多く、開発や埋め立てによって、面積が減少している湿地があつた
- (2) 湿原植生や昆虫類で選定された湿地で、乾燥化による湿地の減少が報告され、中には湿地が完全に消滅した事例も見受けられた
- (3) 一方、「増加傾向」にある湿地もわずかにあり、その要因には、湿地の再生や造成などが挙げられた

以上